
恐怖の日高伝説

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖の日高伝説

【Nコード】

N8331M

【作者名】

作戦参謀

【あらすじ】

『夏のホラー2010』 出展作品！

小説家になろうにて連載中の私作戦参謀執筆、『日高の馬鹿と無口な小悪魔と』のキャラ、主人公の元ツツパリ今そこそこ悪いバカな奴こと日高恭介と、無口なお嬢様の雲雀丘深月、そしてその友達や後輩が夜の下藤野高校へ肝試しに！

そして……恭介達に待ち受ける結末とは……？

一応コメディあり、一応ホラーあり、そして一応恋もアリ!?!?
そんな感じの外伝的作品です!

(前書き)

どもッ！始めましての方もそうでない方もこんにちは！
作戦参謀という者です！

普段くだらない小説を執筆していますが今回は日頃の感謝と夏だからという事で未熟者ながら参戦させていただきました！
正直言うとコメディー色のほうが強いかもで不安ですが……

よろしく願います！それではどうぞ！

ハロー!!!

はい!?俺誰かって!?

知ってる人は知っている、知らない人は覚えてね。

みんなのヒーロー日高恭介様だッ!!!詳しくは原作『日高の馬鹿と無口な小悪魔と』を読むといい!!!

ダアーツハハハ!!!

「どうでもいいけど一応『祭り』用作品なんだからな。あんまし恥がかすなよ?」

「うつせえなあ。ジョンにだけは言われたかねえよ!」

「な、なんで?」

「お前の場合、存在自体が恥だから」

「ひ、ひどすぎるッ!!!!!!」

ジョンは泣きながらその場を去って行きました。

もうこの時点でジョン不参加決定ッ!!!

さーて、祭っつーかイベント用作品なので詳しい事は原作(小説家になるうにて、日高の馬鹿と無口な小悪魔と絶賛(?)連載中!)読めエツ!!!のだが一応始めてという人がほとんどだろうので解説しておくのと泣きながら退場していったのは野中啓二、金 日に似ているからジョンと呼ばれている可哀想な男である!!!

そのわりに妹はかなり可愛いというなんともまあ変な奴さ。

さて、時系列はよ教えんかいでしょう？夏休み中という事なので原作の現在よりもちよっと前の話になるが……まあ夏のイベントだしね。

時期的にそこが妥当だろうと作者は思ったわけよ。だから登場人物同士の関係が現在と多少違うかも勘弁なッ！！

っという製作裏話があったけど……実際にどうでもいいな。

さて、暇だから集まった俺ら……一体なにをやって……

「……夜の学校って出るの？」

この深月の何気ない発言により肝試しをすることになったので現在下藤野高校の目の前ッ！！

あっ、深月ってのは雲雀丘深月ってのがフルネームでワケありで俺の家に居候中の同級生で幼馴染。

そして下藤野高校は俺らが通う学校さッ！！馬鹿と中間クラスとエリートが丁度三分の一いるという奇跡の学校だったり最近俺らが暴れまわってるせいかさこののヤンキーもあんまし喧嘩売らなくなつたほどのある意味恐ろしい高校でえすッ！！

……現在、夜の下藤野高校……

なんとか忍び込んで……

ピチャッ……

「きゃあああああああッ！！！！」

ななななな、何事ッ！？

「……沙希……葉っぱから滴が水たまりに落ちただけ……」

「な、なあんだあ〜！」

さっそく怖がつてる奴がいるよお〜。

沙希ってのは本名は東條沙希で俺の幼馴染、東條道場の正式な跡取りでその実力は元ツツパリの俺や現在もツツパリやってこの肝試しに参加している赤坂以上だという。

「ダアツハハハ！！ やつべえ東條可愛い！！」

つで、この大笑いする人が赤坂。

本名は赤坂薫で俺の中坊の頃からのダチ。お調子者に見えるが喧嘩は強く実力は大体俺と同等ぐらい。

「うるさいツ！ 馬鹿にしないでツ！！」

「まあまあ東條先輩落ち着いてくださいよ。もしかしたら学校内には火の玉とか刺されたヤンキーの亡霊とか………」

「嫌アアアアツ！！！！」

やべえよ沙希その驚き方ツ！！

見てるこつちが面白くなるわツ！！！！

「ツハハハ、ホント可愛いですね東條先輩！」

この元気良さそうな金髪ツインテールのおチビ（ry小柄な女の子は高崎亜矢。

高崎道場の正式な跡取りだが多分沙希よりか弱い女の子と思われる。

実は男嫌いだがどうも俺や赤坂、それにそこにいる巨漢の小山に対しては心を開いているようだ。

「っていつか日高先輩……俺達一応肝試ししてんるんすよね？」

「ああ」

「全然緊張感ないっすよね？ 大丈夫なんですか？ イベントの内容的な意味で」

「知らん、案外開催側にホラーというよりコメディーやんって切り捨てられたりして……」

うん、可能性があるから困る。

っというわけでこれがメンバーなんで、さあてどんどん行きましょ
うッ……！！

とりあえず玄関……

「……静か」

「ホントですなぁ、こんなに学校って静かなんですねぇ」

深月と高崎さんがそっぴいながら歩く。

そして俺も無言で……っつてうおあああぁっ！！？

「きよ、恭！？ 大変だ恭が床に飲み込まれたああああ！！！」

「おおおお、落ち着け東條！！！ 日高ちゃん段差に引っ掛けて転んだだけだっ……！！」

「えっ？」

いてて……

沙希さん大げさっすよ……ホント赤坂の言っとおりっすよ、ええ。

タツ……タツ……タツ……タツ……タツ……

へっ？何この音？

「ひ、日高先輩ッ！！ 向こうっす！！」

小山が示す方向から確かに音が……

こ、これって足音？

「みつきいい〜！〜！」

「……よしよし」

沙希は深月に抱きつき深月は沙希の頭をまるで自分の子供のように撫でていた。

……ホントに沙希ってこういうの苦手なんだな……腕っ節じゃ多分俺より強い癖に。

「だ、段々近づいてきてませんか？」

高崎さんのご指摘通りであった。

確かに足音は音の度に大きくなってゆく。

「き……消えた？」

思わずそうつぶやく……
足音が消えたからだ。

「おいおいやばいんじゃないの？」

流石の赤坂も少し汗をかいていた。
いいですねえ少し寒くなってきましたよー！！？

タツ……タツ……タツ……タツ……タツ……

こ、今度は背後からッ！？

皆リリースする……俺や赤坂、そして小山、さらに高崎さんの拳が
強く握られる。

なんで俺以外の人が拳強く握ってるかわかるって？なんとなくそ
んな感じだからさッ！！

段々足音が近づいてくる。

……近い……誰も振り向こうとしないが近いッ！！

……来る、あと3歩……

タツ……タツ……タツ……

……ッ！……！！……！！……

「誰だゴルアッ！……！！」

バキッ！……ドスッ！……バゴオッ！……！！

ドオオオンッ！！！！！

「ぜえ……………はあ……………ぜえ……………はあ……………」

「大丈夫っすか日高先輩！？」

小山が駆け寄ってきた。

その小山もまだ戦闘態勢だ。

「……………ねえ、恭介？」

「ん？ なんだ？」

「……………幽霊って殴り倒せる？」

「そついえばコイツ殴れるな？」

ああいうのって実態ないからすり抜けちゃうんじゃないの？
よくある設定では。

「ひ、日高ちゃん？ コイツ……………」

「あっ」

「ひひひ……………ひでえじゃないか、おどかそつと思ったのによおッ！
「！」

や、山本オオオオッ！！！！！！

説明しよう、山本とは3年でうちの番長をやっている、しかし俺は
認めないッ！！！！

喧嘩は基本的には強いが要領が悪く格下相手にも不意打ちとかでよく倒される可哀想な人であるッ!!!

「や、山本じゃねえかなーにしてんだよ?」

「う……うっさいざんす……迷っちゃった……」

「とりあえずよ……紛らわしいから消えろおおおッ!!!」

ドオンッ!!!

俺は山本を蹴り飛ばした。

開いていた窓から丁度よく山本は学校から出ていきお星さまになりました

つーかお前この学校の生徒なのになんで迷うんだよッ!!!

「まあ次は任せてくださいッ!! 木刀でやっちゃいますからッ!!」

えーっと。なんで高崎さん木刀なんてもってらっしゃるんでしょう? むしろアンタのほうか怖いわ……

「……とりあえず恭介……これなんとかして?」

「ん? ……はあーこりゃあまあ……」

そこには深月にしがみついた沙希の姿があった。

「おーい沙希、心配しなくてもさっきのは山本の馬鹿野郎だ。幽霊じゃないぞ殴れたし」

「ホント？」

「ホントだってお化けなんているわけねーだろ？」

「うう……ッ！ い、いるわけないよねうんッ！..」

今更そういう沙希。

恥ずかしかつたのか頬を赤く染めていた。

その後、俺らは音楽室のほうに向かった。

「お、音楽室からピアノの音が聞こえてきたらどうするんすか？」

つとなんか怖気づいたような声で小山がいう。

「心配すんなって！ 誰もいないのにピアノなんて演奏されるわけがないじゃないか？」

大体今まで幽霊らしいの出てきてないじゃないか？

だから大丈夫だって！！それにこんな時間に演奏する馬鹿いねーっての！！

そういうわけで俺は音楽室の扉を開けたッ！！………つてか普通鍵するよね？

どんだけ防犯体制手薄なんだよ……

)

「ん？ なんか聞こえるなあ？」

俺馬鹿だからしーらね、なにんだコレ？

「…………エリーゼのために」

「なんだそりゃ？」

「えっ？ 先輩知らないんですか？」

なんかあきれ顔の高崎さん。

もしかしてこれって常識なんすか？

そりゃあベートヴェンっすからね。
by作者。

「おう」

「日高ちゃんが知ってるわけないだろ？ 馬鹿だから」

「お前に言われたくない」

それにしても綺麗な演奏っすね？
誰だひいてるの？

「ぴ、ピアノに誰もいないっすよッ！……！」

「キャアアアアアア！……！」

小山がそう言うと沙希が叫んだ。
た、確かに誰もいねえッ！……！！

さらに風が吹いて……

バタンツ！！

「ド、ドアがツ！！！！！」

「なんだとツ！？」

あれ？これってまずくね？

いろいろな意味でまずくね？まさか現代科学でも解明できない現象が起こった？

……ま、まさかな？

「でどうしようどうしよう人いないよお化けだよ南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏ううう！！！！！」

「……とりあえず落ち着いて……っ てみんな……」

なんかもうカオス状態。

人がいないせいで赤坂とか小山とか無駄な体操してるし高崎さん木刀素振りしてるし……

「ん？ なんだコレ？」

光ってるもの発見！！

……これラジカセじゃね？

スイッチを押すと……

「あっ、止まった」

「……………へっ!?!」「……………」

「……………もしかして……………ラジカセストップされずにずっと音楽鳴らしてた?」

「そういえばなんかピアノにしては音質悪いなあ〜っとおもった。」

「紛らわしいなったく〜次いこ次?」

全員頷いた。

次は……………理科準備室とかどう?

いいですねえそこにしましよう!?!?!?!

「……………なんか……………思ったより怖くない……………」

「そうか? ピアノとか一時的に結構怖くなかった?」

「……………オチ読めてたし……………」

「あらせ……………」

流石深月。

「それに……………私は恭介が怖がる所見るの好きかも……………そして抱きついてきたりしないかな?」

「うおっ!!」

「最近見せないと思ったたら久々に小悪魔らしい一面を見せやがったッ

!?!?!」

「……………ってか可愛いなあ……………それになんか今日の深月の服装露出度

高いなオイッ！

ハーフパンツにタンクトップって……しかも胸がないのと深月が細いせいがぶかく見えるしッ！！

なんつーか、ちらつと見るとあんまし意味なさそうなブラが……これって誘ってるのか？

「なんだお前らラブシーン決めるのか？」

「しねえよボケエツ！！！」

赤坂が冷やかしてきた。

俺はそれを全力否定ッ！！！！

ここで疑問に思った方へ！ 時系列は8月、2人はまだ恋人同士じゃありません。どうなったかは本編参照！
by 作者。

理科準備室

……ガタッ

「キヤアアアアアアアアアアッ！！！！！！！」

「ちょ！ 東條先輩落ち着いてくださいよぉ〜俺がなんかにぶつかっただけっすよ！」

「なんかってなによ！」

「実態あるもんですから叫ばないでくださいよ〜！」

沙希……アンタホラー嫌いはいくつになっても治らないんですな……
はあ……なんかもう疲れてきた。怖いものあんまし登場しないし……

「きょうすけッ！」

ん？

……じ、人骨!?

「ギヤアアアアアアアアッ!?!」

「どうしたのきよ……キヤアアアアアアアアアア!?!」

「ほほほ、骨エッ!?!」

みんなビビっとる!

つてか洒落にならねえよなんで人骨が動いてるんだあ……

おいどうすりゃいいんだ!?

1:人骨を殴る。

2:とりあえず謝る。

3:逃げる。

3……つと見せかけてッ!!

「セイヤッ!」

人骨に右拳ッ!!

頭蓋骨が割れたッ!?!

「いい……痛いザンス……」

「はっ？ ジョン？」

そこには何故か最初に離脱したはずのジョンがいました。とりあえず事情を聞いた。

「みんなひどいいろいろと……！ だからおどかさうと……」

ついで帰ってきた解答がコレだよッ！

マジでどうでもいいわッ！！

「そういう問題じゃないでしょうがああ……！」

「あたたたたたあッ！！ 勘弁！！ 勘弁してえええッ！？」

「黙りなさい……！」

沙希は恒例、ジョンにお仕置きを施行した。

ちなみに現在トイレ前、なんつーか歩いてたら自然とここに来てしまった。

まだジョンは沙希にシメられていた。もう勘弁してやれよってくらい……

「ホント沙希って乱暴するのは好きだよなあ……」

「ああ、まあ……そうだな」

ん？

赤坂の反応がちょっとオカシかった気がするけど……気のせいかな。

「だからつまり俺も仲間に加わりたかったわけであって……」

「でも場所考えろおおおッ!」

「ギヤアアアアアッ!」

制裁を食らうジヨンの叫び声がそれはもう学校中に響き渡った……
と思う。

《うるさい……いい加減にしないと怒るよ……》

「あっ?」

なんだ?女性の声?

「なっ……日高先輩まずいっすよ。まさか先公に見つかったんじゃないっすか?」

「……ッ! 高崎さん危ないッ!」

「えっ? ……うわっ!」

突然誰かが襲いかかってきた!!

……速いッ! ……どこのどいつだ? ……こんだけ早いスピードで動ける野郎……知らねえな。

まさか新手か!? 夜中にほつつきあるく生徒を取り締まる戦闘担当先生がいるのか!?

とりあえず精神を集中させる!!

……あつー！！

「そこだあツー！！」

俺は裏拳を繰り出すツー！！

目標は一瞬見えた……しかしかわされてもない感じなのになんだか何事もなかったような感じ……
なんだ？確かに拳は当たったはずだ。

「日高ちゃん気をつける！！今の拳、すり抜けたぞー！？」

「はあ！？」

「だからその……相手は普通じゃねえー！！」

「キヤアアアアアアオバケエエー！！」

《うるさいといっておろうがああー！！》

一瞬姿が見えたー！！

……今度は沙希に襲いかかろうとしていたー！！
助けようにも距離的に無理、相手の速度も速いし……しかし赤坂が沙希を押ししたツー！！

「いてて……なにするの赤坂あー！！」

「助けたのにそれはひどくねー！？」

「どつでもいいけどお前ら逃げろー！！」

「まったく漫才しとる場合か!!
ガチで相手幽霊かもしれねえってのによぉ!!」

「そうっすよ、ここは日高先輩の言つとお一旦引いたほうが」

「ほらお前ら撤収だ撤収!!」

「そうと決まれば撤収ですね。よし!!」

俺達は藤高におさらば!!

……っと思っただけど俺一人だけこっさり抜け出し、さっきのトイレの方向に振り返ったッ!!
正直怖い……そう思ったその時、奴の姿が現れた。

「……女？」

《……驚いた？ ……あんた中々いい腕してるね……私が実体なら
確実にダメージを受けていた》

赤いスカートのおかつぱ頭の女の子……

見た目はどちらかというとかギ、ツンデレと言いたくなる感じのツ
リ目……

どこかで見ただことあるような……現実じゃなく空想の世界で……

「誰だテメエ……確かにバカ騒ぎしてたけどよ、いきなり奇襲仕掛
ける事はねえじゃないか」

《長谷川花子……別に覚える必要はないわ、どうせこの世の者では
ないし……》

「長谷川……」

そういえば中学の時手下に長谷川って奴がいたな。それとは関係ないか。もちろんだな。ですよー。

……それよりこの世の者じゃねえって……しかもここはトイレの目の前でコイツの名前が花子だった？

……まさか？

「……トイレの花子さんP・S何故か高校のトイレに迷いこんじゃいました編？」

《……正解ね、まつ、現代日本人だから皆私の表面は知ってるのかも……》

随分大人びた奴だな。

見た目ガキだったのに……やっぱり死んでから相当期間があるからその間に成長でもしたのか？

よくわからん……っーかホントにコイツがホンモノなのかすらわからん。

本物だとしたら……殺される！！

「ちよいといいですか？」

《……ッ！？》

あれ？撫でられる？

コイツやっぱ人間でおどかしか？

幽霊ではない……ハズだけどなんだろう？温かくない。なんっーか

……手ノ触った感じ？

(ってわからーんですか！！)

「お前、触れられないんじゃないの？ ホントにこの世の奴じゃねえのかよ？」

《バカ……ずっと触れられない状態だったら襲って人間にダメージを与えさせることができないだろ……まあ、私の戦法は敵をトイレに引き寄せて、敵をトイレの中に引き込むってものだけどね……》

うわあ〜ホンモノだあ〜。

やべえ！！ホンモノって事は俺は……殺される！！

……とりあえず。まずい……なんとかうまくごまかさないと……

「待てよ、なんでそんな事するんだよ？」

《別にあんたに話す必要なんてないでしょ……悪いけど、睡眠妨害よ。だからわざとトイレの外まで迎撃に来た。そついうわけだから……》

「待てよ！！なんかあんなら言ってくれよ!？」

気がついたら俺はそんな事を言っていた……

「そりゃあ生前いろいろあったんだろ？ でもだからって人を襲うってそれはアレなんじゃないか？ ……聞いてやるよ、お前の愚痴ぐら〜」

《……待てよ……あんた名前は?》

「日高恭介だ」

《恭介……か。恭介、あんたは正気か？ 私は巷じゃ恐れられてる奴だぞ？》

「なんだっていいよ、誰にだって悩みくらいあんだろ？」

俺何言ってるんだ？

でも言葉が止まらん……

《……あんたみたいな変な奴は始めてだよ。いいよ、話してあげる……私ね、日曜日友達と学校で遊んでたんだ……でもはげ頭の黒ぶち眼鏡男の変質者に襲われて慌ててトイレに逃げました……》

はげ頭の黒ぶち眼鏡男？

なんじゃそりゃ？明らか不審者……

《でも……トイレのドアを壊され……いきなり殺されました。それ以降……人なんて全員全く信用できなくて……全員に復讐してやるって……》

なんともまあ……仕方ないのか。

子供って思いこんだら最後っばいし……

「そりゃ災難だったな……」

《でも殺害されたのはあくまで人が信用できなくなるっていうものをより大きくしたものにすぎません……人間の中でも変わり者っばい恭介にだけ特別に教える……》

そう言って花子さんは自分の髪を触り、持ち上げた。
なんつーかそこには、傷跡があった。

「どっしたんだそれ？」

あの傷、俺だつたら相当派手な喧嘩をしたって程度で済まされるんだろつがあのくらいのガキがあんな怪我をしているんだから、なんか特殊な事情があるっばい。

《……私ね、お父さんに虐待受けてたんだ。おかつぱにしているのはそれを隠すため……これにさらに殺害だよ？ ……信用できなくなつて……とつ……ぜん……》

そういう花子さんの目には涙が溜まっていた。

……ったく仕方ねえなあ。俺は幽霊相手にもいろいろ言わなきゃならんのか。まあいい、俺はみんなのヒーロー日高恭介様だ！！

「そんな事ないつて……確かに世の中とんでもねえ奴だつているよ。俺の両親なんか息子置いて富士の樹海辺りまで堂々と逃げる奴らだし……でもすべてがそうとは限らないよ」

《……》

俺はさらに優しい口調で続ける。

「少なくとも俺は違うよ。もちろん、さっき花子さんが襲った俺の仲間もね。だからもう少しだけ心開いてみたらどうかな？」

《 …… 》

なんだ？

今度は花子さんの顔が赤くなつとる。

熱でもあんのか？幽霊なの？

《……ありがとう。ホントに……ありがとう！》

つと突然花子さんが飛び込んできた！？

あぶねえ予想以上に強かったもんだから倒れるかと思った！

《恭介さん……》

恭介さん！？

《お願い……あるんだけど、いい？》

お願いねえ……まっ、夏休みどうせ暇だし、聞いてやらんこともないか。

「なんだ？」

《その……私とお付き合いしてください！！》

「はっ？」

なんだって？

《その……もう死んじゃってるけど……どうしても恋人作ってみたかったんです！！大丈夫です私幽霊ですけど幽霊にしかない特殊能力とか用いたりして今回の事、幽霊人生賭けるくらい貴方に酬い

ますますから！ トイレに引越してくれればずっと貴方の傍にいますから！」

い、嫌じゃあああああああ！！！！！！！！！！

「その……すまん。俺、ちょっと用事が……ちよっくら行ってくるわ」

花子さんを身体から離して……

そう言ってからとりあえず俺はダッシュ！！！！

《あっ！！ 待ってください〜い恭介さん！！！！》

嫌アアツ！！！！

何故こうなるんだアツ！？

ホラーだ、お化けなんかには好かれるなんてホラーだアア！！

……その後、俺はしばらくの間、恋する花子さんに追われる日常を過ごしました……（涙）

正直、あの時の自分の行動に今更後悔しています。ハイ。

(後書き)

どうも、いかかでしたか？
ご意見とかご感想とかしてくれるとすっごく嬉しいです！
もちろん苦情でも構いませんので！

以下、オマケ

オッス、オラ日高恭介。
とりあえず作者のダチ（ネタ立案者）からの質問がいくつかあるの
で俺から読ませていただきます。まあミニコーナーみたいなもので
す。

ちなみに俺の解答は作者の解答に準ずるものなので、ここだけの話、
実際に作者が似たような感じで答えたそうです（秘）
それではいきまーす！

Q まず花子さんのキャラおかしいだろ常識的に考えて。
A ……それは多分作者の妄想上の花子さんです。所謂萌えなアレな
ので気にしないほうがいいと思います。

Q これホントにホラー？

A 一応……正直主役やってる俺もそう思う。

Q 消されたら？

A 文句は言えませぬね……ハイ（涙）

Q お前はコメディーマードキしか書けないのか？

A シリアスな展開は苦手だそうです……ハイ（涙）

Q じゃあ小説書くな。

A すみませんorz

「恭介さん!!」

げえっ!!俺はここで!!

あの悪夢の恋する花子が来たッ!!

そっいうわけでここでッ!! さらばッ!!

最後まで読んでくれて本当にありがとうございました。
by 作者。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8331m/>

恐怖の日高伝説

2010年10月10日05時04分発行